

湿地性カラー熊本県育成品種「熊本FCO2」における9月施肥の影響

9月施肥は、草丈伸長、仮軸数の増加、葉の展開速度、切り花品質（切り花長および仏炎苞の長さ）および収穫本数に影響し、無施肥に比べて1~4月の収穫本数が増える。

農業研究センター農産園芸研究所花き研究室（担当者：工藤陽史）

研究のねらい

湿地性カラーの栽培においては、秋に株の充実と収量増を目的に肥料を施用している。しかし、施肥効果は明らかにされていない。そこで、秋の施肥効果を明らかにする。

研究の成果

1. 9月上旬の施肥は、無施肥に比べて11月上旬の草丈は高く、花芽発達が可能な有効仮軸が多く、葉の展開葉数も多い（表1）。
2. 切り花品質は、施肥した方が無施肥に比べて切り花長と仏炎苞長が長く、仏炎苞のシワの発生程度も小さく優れる（表2）。
3. 9月上旬の施肥は、無施肥に比べて株当たりの収穫本数が多く、1~4月の収穫本数が増える（表2、図1）。

普及上の留意点

1. 施肥は、H24年9月3日に「くみあい尿素入り化成580号（水稲用追肥30日タイプ）」を窒素成分で12kg/10aで行った（図2）。
2. H24年7月3日に培土「くみあい園芸用培土MKK野菜1号」を充填した1/2,000ワグネルポットに定植、夏季（定植時~10月上旬）は昼温25℃、夜温18℃（ヒートポンプで冷房）、その後は無加温で管理した結果。
3. 低温期（12~4月）に肥料が過剰に残っていると根腐れを誘発するので、肥効は1~2か月程度を目安とする。特に2~4月に地上部の過剰な生育を促すと根腐れが多発するので注意する。

表 1 9月上旬の施肥が11月上旬の生育に及ぼす影響

施肥の有無	草丈 (c m)	有効仮軸数 (本)	展開葉数 (枚)
なし	62.5	3.3	3.5
あり	73.3	6.3	4.5

n=12、調査日：H24年11月4日

表 2 9月上旬施肥が収量と切り花品質に及ぼす影響

施肥の有無	切り花長 (c m)	仏炎苞長 (c m)	仏炎苞 シワ程度	株当たり 収穫本数 (本/株)
なし	62.3	12.8	0.6	6.8
あり	68.3	14.2	0.3	15.3

n=12、調査期間：H24年9月上旬～H25年4月上旬

仏炎苞シワ程度 0：なし、1：少、2：中、3：大

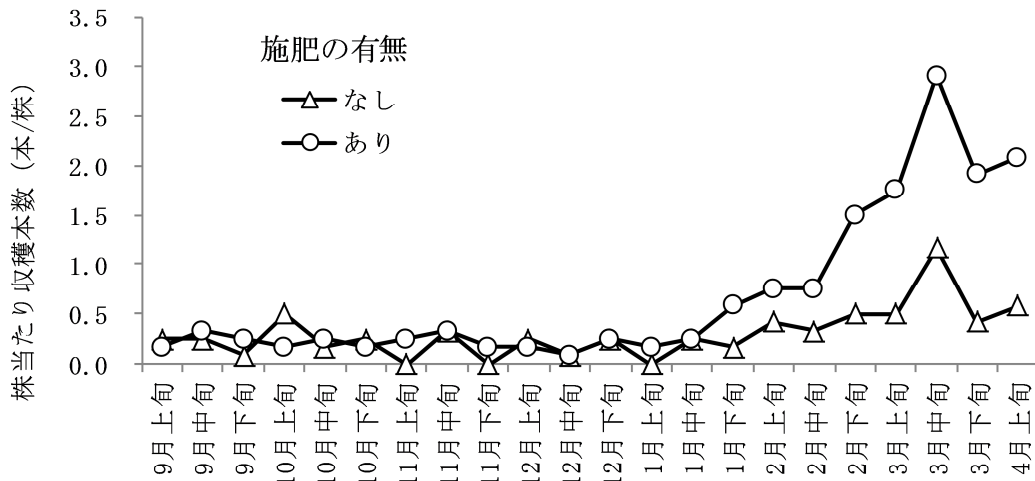
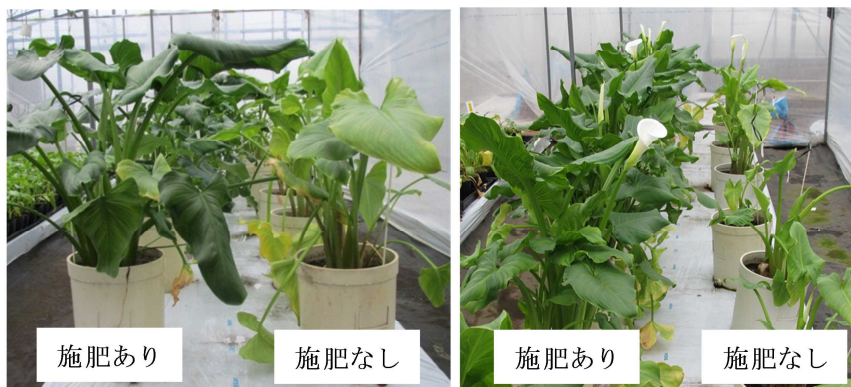


図 1 株当たり収穫本数の旬別推移 (n=12)



H24年11月29日 撮影

H25年2月19日 撮影

図 2 試験の実施状況